

二村一夫著

『労働は神聖なり，
結合は勢力なり』

——高野房太郎とその時代』

評者：小松 隆二

1

労働運動史や思想史の分野で久し振りに秀でた研究業績に触れることができた。ここで取りあげる二村一夫著『労働は神聖なり，結合は勢力なり』がそれである。

同書は、著者が長年取り組んできた黎明期日本の労働運動とその指導者であった高野房太郎に光をあて、高野の生涯、あわせて日本における労働組合の生成過程を解明した研究書である。著者は、9年程前からインターネットの個人サイトに「高野房太郎とその時代」を発表してきたが、その成果を一冊の著書にまとめ直したものが本書である。

同書は、高野房太郎の生涯や業績について多くの新発見を含め、旧来の理解や評価を大きく超える業績にまとめられている。それだけではなく、高野が活動した日清戦争直後から日露戦争に至る初期労働運動に関しても、基礎的事実をはじめ、多くの点で新しい発掘・発見を見せ、既存の研究を超える高いレベルの成果となっている。

それに、優れた業績といえるほどの著作は、研究のあり方や方法論でも考えさせてくれたり、また関連する課題の研究にヒントを提供し

てくれたりもするものである。この著書もその点では例外ではない。

これらいくつかの点から、私は、『労働は神聖なり，結合は勢力なり』が日本労働運動史の領域では近年見られなかったほど優れた研究業績と受け止めている。それは、長年の研究と業績の積み重ねの賜物であるが、もちろんただ長く研究すれば同じような成果が生み出されるというものではない。何よりも世に送り出す研究書というものの意味や役割に対する著者の考え方や使命感、またオリジナルな研究成果を生み出そうとする目標や情熱が、著者の研究姿勢の根底に息づいている故であることを見逃してはならないであろう。

本書全体が、硬い研究論文風にならないためにも簡明・軽快な文章・文体によってオブラートのようにやわらかく包まれているが、その中身は重く、深い。舌触りのよいオブラートのお蔭で、読みだすと、どんどん読み進むことができる。すると、一方で興味津々と引き付けられつつも、他方で自身の心のどこかに先を読むのに何となく腰が引ける気持が芽生えていることに気づくのである。それは、次から次へ著者の言う探偵家の眼による新しい事実や資料、また新しい見方や評価を突きつけられて、従前の自身の理解・認識を覆させられる事態にしばしば立ち至るからである。そのような緊張感や敬意をもって対峙させられる著作にはそう出会えるものではない。

2

すでに触れかけているが、『労働は神聖なり，結合は勢力なり』を読み進むにつれて、研究・研究書とは何か、そこにおけるオリジナリティ・独創性とは何かを考えさせられた。研究書は、形式面からいえば文体が重く、やたらに脚注の数も量も多いというのが一般的である。そ

れに比べ、本書の著者はあえて「です」「でした」調の話し言葉のように明快・軽妙な文体をとっている。そして脚注は一切採用していない。そこからまずオリジナリティや研究水準の高さは、文体・表現法ではないこと、さらに脚注の有る無しでもないこと、つまり研究書とは形式ではなく、内容であることを教えられよう。

脚注は、読者にとってはややもすると煩雑なものである。いちいち頁をひっくり返して本文と脚注の間を往来することで、理解や気分が中断させられたり、そいだりもされる。しかも著者にしか意味のない覚書的な注記も稀にはある。読者を引きつけ、刺激を与えるほどの脚注なら歓迎されようが、覚書程度のものは不要である。その意味で、本文で処理可能なものは本文で扱い、脚注は、どうしても必要で読者にも新たな興味をそそるものに限定すべきではないか。そんなことを同書は教えているように思えた。

それに研究に不可欠なオリジナル性・独創性についても考えさせるものがあつた。では、オリジナリティとは何であろうか、どんな場合にオリジナルと評価できるのであろうか。

私なりにすぐに思いつくことをいくつか挙げてみると、まず①研究のテーマ・主題の選択そのものにすでにオリジナル性・独創性がうかがえる場合がある。②いうまでもなく基本的な事実や原資料の発見・発掘もオリジナル性を評価されてよい。③研究のあり方、アプローチ、筋道等で新しい方法論や理論を提示するものも当然評価されよう。④既存の共通認識である通説を超える理解や認識の提示、あるいは⑤従来気づかれていなかった全く新しい視点や評価の提示なども当然オリジナル性が評価される尺度となろう。さらには⑥著書・著作の構想からまとめに至る全体像が総合性・体系性において秀で、総合的評価からもオリジナル性が認められることもあろう。

本書の著者は、探偵家の眼で迫ると言うが、探偵家のように事件ごとにバラバラに真犯人や真実を突き止めて終えているわけではない。全体の状況・動向におけるその位置、意義、役割をも明らかにすることによって、総合性・体系的やつながりの中で理解や評価をすることも心がけている。後述する労働運動史の書き換えに通じる多くの真実の発見や解明、また新しい評価の提示がそれであり、それこそオリジナルな評価に値し、明らかに探偵家の眼を超えているものである。

そういったオリジナルなものを目標にするのは、研究者が研究に取り組む上で欠かせない基本的な姿勢である。にもかかわらず、全ての研究者がオリジナルな成果をあげられるわけではない。本書の著者の場合、片山潜に比べて研究の遅れていた高野房太郎に取りくむという認識・姿勢から出発しているだけに、新しい事実や資料の発見はもちろん、既存の通説の批判・克服や全体像にわたる認識の修正なども最初から視野に入れていたにちがいない。そのような高い目標・見直し・情熱が把持されていなかったら、今回のように主役のみか、準主役、脇役にまで目配りをし、さらに多くの新しい発見、また初期労働運動の根底からの見直し・書き換えとなるオリジナルな成果は生まれなかったはずである。

それに、著者は既存の資料や文献に目を向ける際、黎明期労働運動の研究者なら同時代のものも、また今日の研究者も、誰もが基本的文献・資料としてほとんど疑いもなく依拠してきたものまで洗いなおす姿勢から出発している。実際に、その種の文献・資料にも事実認識でも誤りがあることを指摘する。片山潜・西川光次郎の『日本の労働運動』にしても、すでに古典として定着した評価がなされているが、それにさえ見直しや検証の目を向ける。片山・西川が

自身運動家であった故に身内の問題ということにかえって甘く構え、運動に参加する以前のこと、また記憶の不鮮明なことをチェックせず、誤記をしていることは考えられたが、それらを見つけ出し、新しい資料・事実を提示しつつ修正・訂正する。このように基本文献さえ疑い、一つ一つ確認してかかる姿勢が全編を貫くのである。

3

ここで、抽象的な言辞ではなく、具体的に日本労働運動史全体に関わる理解を覆す新発見・発掘の事例をいくつか並べてみよう。

例えば、まず①日本労働運動の「源流のそのまた源流」(86頁)と位置づけるアメリカでの職工義友会について、その創設年次に関する既存の理解は誤りであったこと、その名称そのものも労働義友会の可能性が強いこと、②日本における最初の体系性をもつ労働組合論は「労働者の声」ではなく、高野の「北米合衆国の労役社会の有様を叙す」であること、③実はその「労働者の声」の真の執筆者も高野と特定できること、④鉄工組合は職業別組合ではなかったこと、そしてその鉄工組合のみが労働組合期成会に参加した理由、⑤日本における生協運動(共働店)の真の指導者は片山である以上に高野であったこと、⑥工場法制定などの政策要求運動を、高野が全国で熱心に展開していたことが現場の動きや要求の内容と共に具体的に紹介されている点などである。以上のような労働運動史の既成の理解を超えたり覆したりする真実の解明事例をいくつか知るだけで、オリジナル性に関しては圧倒されるはずである。

いうまでもなく、本書の主役は高野房太郎である。日本労働運動の父や生協運動の先駆者の賛辞を受ける人物であり、海外の労働運動(アメリカ労働運動)と日本の労働運動を結びつけ

た最初の功労者でもある。その高野の長崎での誕生から、中国の青島における逝去まで三五年という決して長くはない生涯が、実地調査をもとに、新たに発掘された多くの資料・写真・図書類と共に的確に描かれる。とくに労働組合運動の生成とそこで高野が主役となる活動に力点が置かれるが、実業家としての成功が一貫した夢であった高野にとって労働運動に対する関わりは寄り道であったはずなのに、その時代こそ、彼を最も生き生きとさせ、かつ彼の名を後世に長く残すことになるのである。それ以外でもアメリカへ渡航する往復をめぐる状況・手法(親族との関係、渡航費や開店費など金銭的確保、往復の経路などを含め)、また事業の失敗や夜逃げまでしたアメリカでの生活、あるいは動乱の中国での生活なども可能な限り追跡・解明を行っている。

それに、高野や片山らの性格や気質にまで立ち入っているのも興味深い。例えば高野はアメリカではAFLのS.ゴンパースには労働者や自営業者とは言わず、学生と名乗っていること、それに見栄坊、諦めやすい性格などの指摘は、高野の人間らしさがよく伝わってくる。高野は、異国であれ、そこでの多様な集団、階層、地域にであれ、適応するのはうまいのだが、実業での繰り返す失敗、あれだけ打ち込んだかに見えた労働運動からの離脱に見られるように粘り強さ・積極性に欠け、諦めやすく、また飽き易いという指摘である。「積極性の欠如」(270頁)には疑問がないわけではないが、それらは、高野が自身を労働者と考えたことが無かったこと、渡米や人生の目標が実業家であったのに、ついに実業家としては大成できなかったこと等とつながり、注意を引く点である。

4

準主役の片山潜については、労働運動、生協

運動、セツルメント運動、社会主義運動の最大の功労者の一人として温かい目をもって高く評価しつつも、従来から言われてきた性格的なマイナス面に加えて、労働組合期成会の貢献者としては、高野はもちろん、城常太郎や澤田半之助の方が片山よりも忘れてはならないことなどの指摘は、イデオロギーを超えて客観的に検証しようとする姿勢が伝わってくる。その上で、意外であるが、抜群の事業家センスや組織における柔軟性、著作類の執筆にあたってはつねに他人に手を加えてもらうように自分の限界もよくわきまえていた堅実で慎重な姿勢など、従来見落とされていた片山の良さも指摘される。

もう一人の準主役といってよい秀英舎（現・大日本印刷会社）の創業者・社長の佐久間貞一については、彼に敬愛の気持と恩義を感じていた高野の目を通して語る面が強いので、初期労働運動に対する貢献に高い評価を与えている。ナショナリストとしても、経済理論でも、高野とは極めて近似していたが、研究的な伝記がなかったこともよく似ている。

脇役陣についても、名前程度、あるいは労働組合期成会や『労働世界』との関係程度はわかっていた人物にも新しい光をあてている。そういった輪の中に三好退蔵や金子堅太郎の名前があることに読者は驚かされるが、さらに皇太子の叔父で貴族院議員も勤めた日野資秀、また多くの著作があり、金子堅太郎の知遇を受けた鈴木純一郎に関する論述は、従来知られていなかった事実・評価の提示があって、得るところが多い。

やはり脇役の人物で、労働者・下層社会のよき味方であった横山源之助については、植松考昭とともに『労働世界』との関わりについて詳しく記述されているが、それと共に横山と高野との信頼しあえる関係、『職事情』に対する横山の役割と高野の協力については、短くさりげ

ない言及ではあるが、興味を引く指摘である。

あるいはまた、早稲田の総長として大学の普及や大学まちづくりにも寄与した高田早苗についても、学位よりも独習や実践を重視した洋行論が横浜時代の若い高野に影響しただけではなく、まだ大新聞とはいえない時代ではあったが、読売新聞の主筆の立場から高野に通信員や社友の地位を用意してくれたように、高野の進路の決断や活動に少なからぬ関わりをもっていたことが明らかにされている。

その他、脇役あるいは準主役としては、妻キクと実弟の高野岩三郎について、キクが清国公使と再婚することや岩三郎による兄没後の埋骨のことなども明らかにされている。また鉄工組合等の組合員・役員の実態も、可能な限り掘り起こし、紹介されている。

5

最後に、すでに約束の誌面は尽きているが、御許しをいただき、本書を読みつつ考えさせられたことや残された課題をいくつか指摘して終わりとしたい。

まず貸席について。貸席は、イギリスにおけるパブの役割に似て明治・大正期の労働・社会運動とは縁が深い。例えば労働組合ともつながりの強い社会政策学会が東京・九段下の玉川亭で出発していることは、よく知られている。この玉川亭については、利用者であったはずの弟の岩三郎までくり返し「神田今川小路の玉泉亭」（「社会政策学会創立の頃」『帝国大学新聞』創立15周年記念号、1935年）と誤記しているが、本書を含め、いくつかの著作に見られる玉泉亭は誤りである。一八一八（文政元）年に創業の筆屋（筆、墨、硯など書道の道具類を扱う専門店）・玉川堂が明治に入って、九段下の神田川にかかる俎橋の船着場近くの敷地の一郭に始めたのが茶亭（貸席）玉川亭であった（現在の神

保町交差点寄りの神田神保町三-三には大正初めに移転)。穂積陳重の『法窓夜話』等にも出てくるように東大法学部の教授陣もよく利用した店である。穂積や房太郎は実際に利用しただけに玉川亭と正しく記述している。

この貸席については、大正に入ると労働組合との関係が一層緊密になるが、その実態や役割がもっと調査・研究されてよいのではないかと。今後の課題と考えている。

次に、高野には、アメリカ時代の論稿はじめ、労働問題以外にも先駆的な主張がいくつか見られる。とくに教育の役割については、高野が一般教育も、労働者教育も極めて重視していたことは留意されてよい。例えば義務教育の実施と無償化、また労働組合に教育機関・教育機能の役割を期待し、早くから訴えたことも先駆的である。この教育の側面から高野の労働者論・労働組合論を見ることも有益ではないかと思う。

もう一つ、労働組合運動が生成する準備・支えとなる労働組合論や労働者に団結を訴える文献は、「北米合衆国の労役社会の有様を叙す」や「労働者の声」以外にもまだ発掘される可能性があるという点である。労働組合を紹介した文献は、著者も指摘するように経済学の翻訳書など明治初期から少なくないし、高野の説明よ

りも読み易いものも見られる。中には労働者の団結の意義を紹介するものも見られる。この点で、先の二つ以外にも日本人による先駆的な労働組合論が発見される可能性が決してゼロではない。後続の若い研究者にそのような新事実発掘への挑戦を期待したい。ベルモレー・林庸介訳『社会論・第一巻』(自由出版会社, 1883年), 同盟進工組趣意書等も発掘の一つのヒントになろう。

以上の3点の課題は、『労働は神聖なり、結合は勢力なり』に欠けているということではなく、今後一層の研究の必要を同書から示唆されたものである。

著者は、最後に労働運動史における高野の役割・評価として「労働組合をゼロから作りあげたこと」(287頁)など4点を挙げて結びとしている。同書は、高野の全体像と初期労働運動について総合的に検証、解明した、著者の年齢を忘れるほど瑞々しい労作で、労働運動史研究者にのみか、研究を志す全てのものに多くの教訓を与えてくれる業績である。

(二村一夫著『労働は神聖なり、結合は勢力なり—高野房太郎とその時代』岩波書店, 2008年9月刊, xv+298+7頁, 定価2800円+税)

(こまつ・りゅうじ 東北公益文科大学特任教授)